

保業者論としての仏教保育— 仏教保育の理念と授業実践 —

仏教文化研究所所員 橋本 弘道

一、宗教学と仏教保育

本日は、「保業者論としての仏教保育」という論題で発表をさせていただければと思います。鶴見大学短期大学部の保育科では、前期に必修科目として宗教学の授業を行っています。そして、後期には仏教保育という授業を必修科目にしています。本学保育科では、どちらも卒業必修科目ですから、これらの単位を取得しなければ卒業できないという、とても大切な科目として位置付けています。宗教学の授業では、宗教を基盤に生活をしている人々の価値観について学んでいます。日本では、特定の宗教に所属していると意識している人たちは二十パーセント前後だと言われています。ということは、残りの八十パーセントの人たちは、自らが何らかの宗教に所属しているという意識を持たずに暮らしているということになります。

では、世界全体を見渡した場合はどうでしょうか。例えば、全世界でキリスト教を信仰している人たちは人口比で約三十パーセント程度だと言われています。また、イスラム教を信仰している人たちは約二十パーセント前後だと言われています。ということは、地球上の人口の約半数近くが一神教を信仰している人たちだということになります。さきほど、五十パーセントを超える人たちが一神教を信仰していると言いましたが、さらに、日本人の八十パーセントが特定の宗教を信仰しているとは言えないと答えているわけですから、その意味において、多くの日本人は宗教的

にはマイノリティであるということになるのではないかと思います。そして、それは様々な意味で宗教的知識が相対的に乏しいということを意味している可能性もあるのではないかと思います。ですから、宗教学として敢えて宗教的価値観を中心にして生活をしている人たちのことを学ぶことは意味のあることだと考えています。横浜は国際都市ですし、多くの外国人が居住しているわけですから、それは、様々な宗教的背景を持った人たちが生活しているということと同義だと言えるのではないかと思います。保育者は、子どもの保護者や地域における子育て支援なども行うことになっていきます。ですから、特に本学保育科で保育者になろうとしている人たちには、ある程度、宗教的価値観を基盤に生活をしている人たちのことを理解しておいて欲しいと思っています。例えば、宗教上の理由で子どもに食べさせて欲しくないものがあつた場合、それは、その宗教を信仰している人たちにとつては、とても重要な生活上の約束事になるわけです。しかし、保育者がそのような価値観について認識していなければ、宗教上の振る舞いを身勝手な振る舞いだと感じる可能性はゼロではないと思います。日本には、「郷に入れば郷に従え」という諺があります。が、宗教的価値観とその諺の根底にある日本的な価値観とは相容れない部分があると思います。ですから、やはり、そのような宗教的価値観については、それらをしっかりと許容していけるような知識と教養を保育者にも持つておいて欲しいと考えています。したがって、宗教学においてはその点を最も重要な視点にして授業を展開しています。

二、仏教保育の理念

前置きが少し長くなりましたが、次に本発表の本題である「保育者論としての仏教保育」に関してお話しをさせていただきます。ただだけばと思います。まず、仏教保育の授業の流れについて触れたいと思います。まず最初の授業では、仏教と保育の共通点を明確にした上で仏教保育の定義を示しています。そして、次に釈尊の一生を概観し、釈尊自身の人生観について考察を加えています。さらに、仏教の考え方を仏教保育の視点で捉えるとどのような解釈が可能になるか

という点について具体的な事例を挙げて説明をしています。仏教は、人生をいかに生きるかということが一つの大きなテーマになっていると解釈できると思います。ですから、仏教を学ぶことで学生自身が自らの人生をどう捉え直すことができるかという点が重要な視点になってくると考えています。すなわち、保育者が人生をどのように捉えるかという人生観が、保育者自身の保育観を形成していく土台になる、その人生観について問いかけるということが仏教保育の根底にある理念であるということです。ですから、仏教保育を学ぶということは、どのような保育者になりたいか、どのように子ども達を保育していきたいのかという保育者論に直結していくと思っています。そのような意味で「保業者論としての仏教保育」という視点で仏教保育の授業を展開しています。

続いて、仏教保育を学ぶことの意義についても少し詳しく述べていきたいと思えます。まず、明確にしておかなければならないのは、仏教主義の保育を行っている園に就職するための教育を仏教保育の授業で行っているわけではないということです。仏教の考え方をできるだけシンプルにし現在化することで、様々な環境の園で保育をする際の一つの指針にして欲しい。そして、保育者自身の保育理念の形成に寄与できるように授業内容にしたいとの思いで仏教保育の授業を行っています。そして、仏教保育を学ぶことによって、学生がどのような人生観を持ち、どのような保育観を形成していくのかということが最も重要な視点なのではないかと考えています。ですから、仏教保育では、視聴覚教材なども交えながら保育者になろうとする学生の人生観について問いかけることで、自らがどのような人生を送りたいのかということについてしっかりと考えてもらい、さらに、自らが子どもたちにどのような人生を歩んで欲しいと考えるのかという視点を持つことで各自の保育観を形成して欲しい、そのための考え方の一つとして仏教保育について学んで欲しいと考えています。そのような意味において、本学の仏教保育は、「保業者論としての仏教保育」であると言えるのではないかと思います。そして、その視点に立ちつつ試行錯誤を続けながら授業の構築を試みています。

三 仏教保育の授業内容

先ほど仏教保育の授業の流れについて述べましたが、次に授業の具体的内容について述べていきたいと思ひます。最初の授業では、まず、仏教保育の定義を確認することから始めます。本学では、仏教保育の定義を「いのちを大切にしましようというおしゃかさまの教えを子どもこのころに育て、自分のいのちも自分以外のいのちも大切にすることを育てていく保育」であるとしています。これは、本研究所の所員である佐藤達全先生が定義されたものです。釈尊は、お生まれになられたとき七歩歩いて「天上天下唯我独尊」とおっしゃったと伝えられています。これを直訳すれば、「世界中でただ一人自分だけが尊い」ということになるのではないかと思ひます。しかし、それは自分と同じようにすべての人が尊い存在なのだということを示しているとも言えるのだと思ひます。ですから、意識すると「世界中でただ一人自分だけが尊い。そして、それと同じように世界中の生きとし生けるものすべてが尊い」という意味に解釈できるのだと思ひます。したがって、学生にはそのように説明をしています。そして、仏教保育の定義にあるとおり、仏教保育における授業のキーワードは、「いのち」を大切にすること、「このころ」を育むという意味で「いのち」と「このころ」であると考へています。さらに、これは、保育そのものにおいても中心的なキーワードであると言へるのではないかと思ひます。保育とは、養護と教育であると定義することができですが、養護とは「いのち」を守るといふことです。そして、教育は、自他を共に尊重する「このころ」を育んでいくということが重要な使命の一つになるのではないかと考へられます。これらのことから、仏教も保育も「いのち」と「このころ」の問題に取り組んでいると言つていいのだらうと思ひます。ですから、仏教と保育とは、もともと「いのち」と「このころ」という共通項で結ばれた部分があると言へます。学生には、仏教と保育の共通点をそのように説明しています。

では次に、「いのち」と「このころ」というキーワードについて、本学の仏教保育では具体的にどのように取り上げ

ているかということについて言及していきたいと思います。まず、本学の仏教保育では、「いのち」の繋がりにということについて考えます。例えば、自分の「いのち」は、自分だけのものかという問いに対して、みなさんほどのようにお答えになられるでしょうか。自分の存在というものを考えたときに、やはり、「いのち」の繋がりにという視点に立つと、まずは両親の存在が意識されるのではないかと思えます。そして、祖父母、曾祖父母とどんどん遡っていくことで、「いのち」の繋がりを意識できるのではないかと思えます。自分の「いのち」は、両親、祖父母、曾祖父母と三代遡っただけでも、十四人の「いのち」を受け継いでいることとなります。そして、その「いのち」が長い時間を通じて一度も欠けることなく繋がってきたからこそ今の自分がいるわけです。例えば、奈良時代や鎌倉時代、江戸時代においても自分の先祖は必ずその時代を力強く生き抜いていて次の世代に「いのち」を繋いでくれた、そのおかげで自分は今、存在しているわけです。そのような感覚があれば、自分の「いのち」は自分だけのものではないかとも言えないのではないかと思います。多くの先祖に支えられて今の自分があるということを感じる事ができていけば、自分の「いのち」は自分だけのものだという考え方にはならないと思えます。日本の家庭が核家族化する前は、各家庭に仏壇があり、頂き物があった際には、仏壇に一度お供えをして、そのお下がりवादくという習慣があったと思えます。そのような日常においては、そのつど先祖との「いのち」の繋がりを自然と感じ取っていたのだろうと思います。しかし、現代は核家族化の進展とともに仏壇がある家も少なくなっているでしょうから、そのような体験を日常にすることも少なくなってきたのではないかと思えます。であるならば、将来、保育者になる学生には、敢えてこの時期に仏教保育を通して「いのち」の繋がりにということについて意識的に考える機会を持つて欲しいと思っています。「いのち」の繋がりを意識できれば「いのち」の大切さも同時に実感できるのではないかと思えます。そして、それが、保育者の人生観と保育観にも影響を与えるのではないかと考えています。

今お話しした「いのち」の繋がりは縦方向の「いのち」の繋がりですが、横方向の「いのち」の繋がりにということ

についても考える必要があるのではないかと思います。それは、「食べる」ということについて考えるということです。生きていくためには食べるというかたちで「いのち」を頂くことになります。「いのち」の繋がりとという視点で考えると、「いのち」が食べ物になっていくという過程があります。例えば、魚を釣ってきて捌いて食べる、ブタなどを育て屠畜して食べるなどということがあります。一昔前は、それを目の前で目に見える形で行っていたと言えます。ですから、「いのち」が「食べ物」に変わる瞬間を可視化できていた訳です。しかし、現在は、そこが完全に見えなくなってしまった。「いのち」が「食べ物」に変わっていくという「いのち」の移り変わりが見えなくなってしまうということがあります。また、私たちの食べたものが排泄されて、それが田畑に散布されて肥料になり、それが新たに自然を育んでいくという「いのち」の循環も見えづらくなってしまうました。であるならば、せめて保育者になる学生には、「いのち」が「食べ物」になり、排泄されたものが新たな「いのち」を育むという食の循環について知っておいて欲しいと思います。「いのち」を頂いているということについて自覚できれば、「いのち」を頂いている自分は、それに見合った生き方をしているだろうかという自らの人生についての問いかけにも繋がるのではないかと思います。禅宗では、食事の前に「五観の偈」という偈文を唱えてから頂きますが、その意味は、今申し上げた精神が内包されていると言えると思います。

そのように考えていくと、私たちは、縦方向と横方向の「いのち」の繋がりによって生かされていると言えるのではないかと思います。保育者が子ども達に「いのち」の大切さを伝えていくことは難しいことであると思いますが、日常的な保育者の姿勢として、そのことを自覚しているのといかないのでは、やはり、子ども達を保育している際の視点が異なってくるのではないかと思います。

これまで、「いのち」を中心に仏教保育の具体的な考え方について発表してきましたが、次に「こころ」の部分について言及したいと思います。本学の仏教保育では、釈尊の生涯を概観することで仏教についての理解を深めていく

ことも重要な視点であると考えています。釈尊の生涯を構造化して捉えるようになるかと思いますが、釈尊は悟りを得るまでの前半生において人生は苦しみに満ちていると感じていたと言えるのではないかと思います。生老病死を四苦としたことにそれが象徴的に現れていると思います。それはすなわち、現実生活に対して悲哀を感じていたということなのだと思います。人間は不安と苦しみの中に生きているということを実感し、人間はどうして生まれ、老い、病み、死んでいかなければならないのかという問題に直面したということです。そのように考えると釈尊の前半生は、悲観的人生観に基づいていたと言えるのではないかと思います。そして、悟りを得てからはある意味で楽観的人生観に転換していったと考えてもいいように思います。人生は苦しみの連続であるけれどもその苦しみを受け入れながら限りある「いのち」を慈しみを持って味わい、力強く歩んでいくことを推奨したと考えることができるのではないのでしょうか。そして、これを仏教保育の視点で捉えると、子どもたちには人生の様々な苦難を乗り越えて力強く生き抜いて欲しい、そのための保育とはどのような保育であるのかということを日常の保育実践の中で保育者自身が考え続けていくことが重要になると言えるのではないかと思います。

ここですべて挙げることは不可能ですが、釈尊に関する様々な説話や仏教の教義を仏教保育の視点で捉えることができるのではないかと考えています。釈尊の人生において象徴的な出来事として語られるものに若者の頃に体験した四門出遊の説話があります。釈尊は、その経験によつて老・病・死について考え人生は苦しみに満ちていると捉えたわけです。そして、それがきっかけとなり出家し、修行の後に悟りを得ました。そう考えると、四門出遊は疑問、すなわち「気づき」の機会を得たということになり、出家は「探求」、悟りは「理解」と図式化できるのではないかと思います。保育においても、子ども達のさまざまな様子から「気づき」を得ることはとても重要なことだと思えます。「気づき」が「探求」を促し、やがて「理解」へと繋がっていくという方向性が保育の現場にもあるのではないのでしょうか。そのように考えると、この説話についても仏教保育の視点に基づいた解釈が可能になるのではないかと

思っています。

次に釈尊の悟りの中心的な教義の一つである縁起説について仏教保育の視点から考えてみたいと思います。縁起説を最もシンプルに表現すると、すべてのものは原因と縁と結果の連鎖によって生じるということだと解釈していいと思います。少し大ざっぱな説明になってしましますが、例えば植物を例にしてみると、種が原因、水や日光や養分が縁、実が結果だと表現することが可能になるのではないかと思います。それを次は人間に例えてみると、原因はもともと持っている資質で、縁が環境、結果が成果という形で図式化が可能になるかもしれません。そのように考えると、環境としての縁がとても重要であることがわかります。保育は環境を通して行うということが前提になっていますが、保育における環境は保育者の関わりがかなりの部分を占めていると考えていいのではないかと思います。ですから、仏教保育の視点から考えても縁としての保育者の子ども達へのかかわりが大変重要であると言えるのではないかと思います。

その他にも仏教には様々な教義がありますが、ここでは、四諦について仏教保育の視点で考察を加えてみたいと思います。四諦は、苦諦、集諦、滅諦、道諦を表しています。これは、元来、苦しみを分析的に把握しそれを取り除くための方法論を示していると言えるのではないかと思います。これを仏教保育の視点で解釈すると次のように表せるのではないかと思います。

苦諦…保育の難しさや上手くいかなかったことをしっかりと自覚する。

集諦…その難しさや上手くいかなかったことを客観的に把握し分析する。

滅諦…その原因について究明し、よりよい保育を実践するための解決方法を見いだす。

道諦…そのための具体的な保育方法を実践する。

保育者の専門性ということを考えて場合、やはり、現状をしっかりと自覚し、それを客観的に分析、把握し、解決

方法を考えた上で実践するということが大切な視点になるのではないかと思います。その意味でこの四諦の考え方をこのような仏教保育の視点で捉えることは重要なことだと考えています。

最後に、釈尊が入滅されるときに説法なさったと伝えられている「自灯明 法灯明」について仏教保育の視点から言及したいと思います。これは、釈尊入滅後のことを弟子達に語られた言葉であると伝えられています。一般的に「自灯明」とは、自らを頼りに生きていくということですし、「法灯明」とは、釈尊が説かれたこの世の法則を頼りにして生きていくということを示していると考えてよいのではないかと思います。これを仏教保育の視点で捉えるのと、どのようになるでしょうか。「自灯明」は、自分の頭で保育についてしっかりと考えること。「法灯明」は保育の専門知識を駆使して、正しい保育とはどのようなことかということを検証し続けていくことであると解釈できるのではないかと思います。

四、保業者論としての仏教保育

これまで、仏教保育における視点とその授業内容の一部を紹介してきましたが、最後に今回の発表のまとめをしたいと思います。やはり、学生には仏教保育を学ぶことで、いかに人生を歩んでいくのかという人生観を明確に意識する一助にして欲しいと思います。そして、その人生観を通して保業者としての資質の向上をはかって欲しいと思っています。保育所保育指針にも、「子どもの最善の利益を考慮し、人権に配慮した保育を行うためには、職員一人一人の倫理観、人間性並びに保育所職員としての職務及び責任の理解と自覚が基盤となる。」とあります。先ほどの宗教学の話の中でも触れましたが、人間の倫理観については、世界の多くの人々に対し宗教が担ってきたというところがあるのではないかと思います。しかし、日本では、日常生活において宗教的価値観をあまり意識していない人が多いと言えます。ただし、それは、例えば仏教で言えば、日本人の中に仏教的な考え方が沈着しすぎて意識していないだ

けだという解釈もあるのではないかと思えます。それを改めて意識することで仏教の考え方を保育に生かしていくというのが仏教保育の目的の一つでもあると考えています。そして、本学の仏教保育では、人生をどう捉えるのか、子ども達に将来的にどのような人生を歩んで欲しいのかということを保育者自身が哲学的に探求していく姿勢が重要であると思っています。その意味で、仏教保育は、保育者論を説いている側面があると考えています。

限られた時間の中で発表でしたので、本学の仏教保育における考え方や授業内容のすべてを紹介できたわけではありませんが、以上で「保育者論としての仏教保育」についての発表を終わりたいと思います。ありがとうございます。

【追記】本稿は、平成二十九年六月十日に行われた鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム「仏教に学ぶ保育の原点」において発表した内容について加筆、再構成しまとめたものである。